

南太平洋に桜散る―
幻の叔父・山岸昌司を追って

続編Ⅱ

乙飛六期 故 山岸昌司 様
姪 平林 峰子

再び杜の都仙台へ

令和元年十一月五日、私は再び仙台を訪問しました。平成三十年十月、叔父の戦友である高橋金六さんのお墓参りのために、始めて仙台を訪問した時は、時間の余裕がなくて行くことができなかった岩手県一関市を訪問しました。

そして今回の旅の目的は、叔父と同期生であった 乙種飛海軍飛行練習生第六期、佐々木孝さんのお墓参りをする事です。

そうです、一関は佐々木孝さんの故郷です。

佐々木孝さんは、大正九年三月に同地で産声をあげ、十五歳で乙種海軍飛行予科練習生第六期生として横須賀海軍航空隊に入隊されました。

三年間の訓練期間を終え、館山海軍航空隊、宇佐海軍航空隊、鈴鹿海軍航空隊を経て昭和十七年一月三十日、第三十五海軍航空隊（セレブス島マカッサル基地）勤務を命ぜられ、二月にマニラを目指すことになっていたので、任務途中の事故で殉職

いたしました。

この年は一月下旬から沖縄・台湾方面に、二週間も低気圧が停滞し、台湾直行は無理と判断して、コースを上海（戌基地）経由に変更しました。そして、二月十九日午後一時十五分、西岡中佐指揮する第三十五航空隊八機は上海の戌基地を出発、一路高雄空を目指しました。

しかしながら、気象条件最悪の濃霧の夕暮れ時、台湾新竹三又上空にさしかかった時に悲劇は起きました。

最初に八機編隊の三番機が突然地上の高圧線に触れて炎上、一筋の炎を引きながら墜落、その直後に一、二小隊の五機が谷間の袋小路に迷い込み、大平山の中腹に相次いで激突墜落したのです。六機の搭乗員十二名は全員爆死したのです。そのうちの一人が当時二十一歳の佐々木孝一飛曹でした。

十一月五日、仙台駅に着くと、佐々木さんの甥御さんである猪股恒一さんの懐かしいお顔が、仙台駅の改札口にありました。

猪股恒一さんは、昨年の仙台訪問時に、叔父の戦友であった仙台出身の高橋金六さんが眠るお墓を、仙台市内中のお寺をあちこち訪問しては、一基一基回って、探しだしてくださいました。

昨年は、猪股さんの案内で高橋さん

が眠るお寺を訪れ、そして墓前に静かに手を合わせご冥福をお祈りして仙台を後にしました。

翌日に山形県で開催される慰霊祭に出席することもあり、名残惜しくもあったのですが、来年改めて必ず猪股さんの叔父さんである佐々木孝さんのお墓参りに行こうと心に決めて山形に向かったのです。

そして一年が過ぎ、約束の日がきました。

仙台駅頭でのご挨拶もそこそこに、構内の食堂で昼食をすませ、猪股さんの車で再度高橋金六さんのお墓を訪問し、再会のご挨拶と今回の旅の安全をお願いさせていただき、車は、この旅の目的地である岩手県一関市へと東北自動車道を一路北上しました。

一時間程で佐々木孝さんが眠る墓地に着きました。そこは、佐々木さんの生家から数分離れた、広大な畑の中にある小高い丘の上にあり、景色が良く、澄んだ栗駒の空はどこまでも青く透明で、私の故郷である長野より山がないからなのか、とても広々と感じられ、晩秋の穏やかな風が頬に心地よい静かな場所です。佐々木さんは眠っていらつしやいました。

昨年、仙台まで来たのにお墓参りがかなわなかったお詫びや、叔父の山岸の事知っていますかなど、お会い出来たら是非聞いてみたかったこ

とを一人つぶやきながらお墓参りをすませ、仙台に戻ることにしました。



故佐々木孝さんの墓前にて

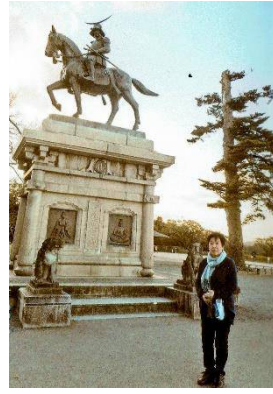
仙台へ戻る車中、私は、昭和十六年五月八日、叔父たちが見学をしたと言う青葉城址を見たくなり、猪股さんにお願ひし訪問することになりました。

仙台城は一六〇二年に初代仙台藩主伊達政宗が造営したお城で、仙台市内の西に位置し、城の東側は広瀬川に臨む断崖、西側は御裏林（おうらばやし）と呼ばれる山林、南側を滝ノ口溪谷が取り囲むという自然の地形を巧みに利用した「山城」です。

そんな難攻不落の城を一代で造営した政宗騎像の前に立ち、眼下に広がる仙台市内を一望すると、「ここが叔父さんも来たところなんだね」とまるで八十年前にタイムスリップしたようで、何だか不思議な気持ちに

なりました。

城址のところどころには、石垣が造営当時のまま残されていて、昔の石積み技術の高さが素人の私にも十分感じ取れました。



仙台城址政宗騎像前にて

叔父山岸昌司の同期生の墓所と思
い出の場所を巡る今回の旅もそろそ
ろ終わりの時間となり、猪股さん
にお礼を述べ、来年五月土浦の予科練
戦没者慰霊祭でお会いしましょうと
お別れし、新幹線で長野への帰路に
つきました。